

筑波大学附属図書館所蔵『袖中集』について

綿 拔 豊 昭

はじめに

筑波大学附属図書館に「袖中集」と題された連歌書が所蔵される。最上義光(一五四六～一六一四)の重臣楯岡(赤尾津・本城)満茂(一五四七～一六三九)の「執心」に
より、法印心存によって編まれたものである。

最上義光の連歌については、すでに木藤才蔵『連歌史論考下増補改訂版』(平成五年、明治書院)に記述があり(八一～一五頁)、『連歌辞典』(平成二十二年、東京堂)にも立項されている。また最上義光歴史館発行『歴史館だより』には、名子喜久雄「最上義光連歌の世界」⁽¹⁾他、義光の連歌に関する記事が少なからず掲載されている。さらにまた義光が一座した連歌作品なども翻刻されている。⁽²⁾ こうしたことから、義光が連歌に関心が深い大名の一人だったことは周知のことといえようか。しかし、長谷勘三郎氏が

山形光明寺に一花堂乗阿が住職となっていた時期には、「義光公御一門方、毎度連歌之御会これあり」(光明寺由来記)といった有様だった。

「山形歌壇」とでも言えそうな盛況だったのだろう。特に熱心だったのが、東根城主、里見薩摩のグループで、東根で催した連歌作品を京都の宗匠に届けて、通信指導まで受けていた。(中略)惜しむらくは、東根衆の連歌作品が見つからないことだ。

と述べられているように⁽³⁾、東根衆に限らず、現存する最上義光の家臣の連歌作品はとほしい。

義光の家臣であった満茂と連歌の関わりについては特に注目されることはなく、『袖中集』についても、平成八年に刊行された『筑波大学和漢貴重図書目録』(筑波大学附属図書館)に解説が載るが、平成二十年に刊行され

た『俳文学大辞典 普及版』(角川学芸出版)にも、同十二年に刊行された『連歌辞典』(東京堂)にも立項されていない。

心存なる人物については不明だが、満茂の「執心」によって連歌書をまとめたということは、最上家やその家臣が関係する連歌会に一座する僧であったと考えられる。とすれば、『袖中集』は山形地方でなされた連歌作品そのものではないが、最上義光が治めていた地域の連歌を知る上では貴重な資料といえよう。

そこで『筑波大学和漢貴重図書目録』より詳しく内容等を紹介し、若干の考察を加えたい。

1-1

はじめに『筑波大学和漢貴重図書目録』の解説を以下にあげる。

二一六 袖中集 一卷 一冊 (ナ220-62)
积心存編。慶長一八(一六一三)年写。积心存筆。横本。
外題なし。内題…袖中集 心存和尚。
五五丁。各面一七行。縦一六・六cm、横二四・三cm。袋綴。

奥書…右袖中集閑舜余暇に累／暦毎座連歌に付来可為／本歌を加て袖裏に注し侍候を／山形豊前守満茂御執心／

異作之儘伊呂波字ニ書／立進之畢古来稀者／筆損落之跡後覽之方被／糺明之志 多幸々々 法印心存(花押)／慶長十八癸丑稔／霜月下句筆劫訖。
他に伝本なし。

印記…阿波国文庫(徳島藩蜂須賀家)。不忍文庫(屋代弘賢)。

この後に「阿波国文庫」と「屋代弘賢」に関しての注があるが省略する。

書誌については首肯される。なお解説では省略されたようだが、奥書の後に押された「阿波国文庫」印の後に、「飯田某重生」と墨書されている。

奥書の翻字に関しては、「伊呂葉」を「伊呂波」とする、変換ミスと思われる単純な誤りのほか、「袖裏に注し侍候」は「袖裏に。注し侍候」と「千首余」が落ちてゐる。また「異作」は「異他」、「古来稀者筆」は「古来稀老筆」と読むべきか。

なお『袖中集』の収録歌数は、項目別に記すと以下のとおりである(洋数字が歌数)。

「い(38)」「ろ(0)」「は(41)」「に(14)」「ほ(53)」「へ(3)」「と(10)」「ち(12)」「り(0)」「ぬ(3)」「る(0)」「を(21)」「わ(5)」「か(88)」「よ(10)」「た(39)」「れ(0)」「そ(3)」「つ(51)」「ね(2)」「な(27)」「ら(0)」「

「む(32)」「う(72)」「る(0)」「の(5)」「お(23)」「く(15)」「や(20)」「ま(26)」「け(1)」「ふ(27)」「こ(55)」「え(0)」「て(4)」「あ(43)」「さ(26)」「き(38)」「ゆ(29)」「め(1)」「み(21)」「し(63)」「ゑ(3)」「ひ(37)」「も(25)」「せ(12)」「す(30)」
奥書に「千首余」とあるように、総計千二十八首が収録されている。

1—2

題名の「袖中集」は、奥書からすれば「袖裏(そでうら)」に用いる布に書き留めた和歌集の意であろう。「袖裏集」とせず、「袖中集」としたのは、後世の歌人に広く利用されたとされる、顕昭が編んだ歌学書『袖中抄』を意識したものか。『袖中抄』は言葉の解説がなされたりした歌学書であり、『袖中集』も、後述するごとく、言葉に注目し、その言葉を含む和歌をあげる、という記述の仕方をする。

編者の「心存」については不明である。先に指摘したように奥書を「古来稀老筆」と読むことができ、それを「古稀の老人による筆」と解釈できるならば、慶長十八年(一六一三)に心存は七十歳であったか。

1—3

奥書にある「山形豊前守満茂」は、「山形」とあること、「豊前守」とあることから、最上義光の家臣楯岡(赤尾津・本城)満茂と考えられる。慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原合戦後、由利郡に約四万石を与えられ、それは最上家中における最高の禄高であった。元和八年(一六二二)に最上家が改易された後は前橋の酒井家に仕えた。由利本荘市ホームページに「本城満茂書状」が紹介されている(2021/8/7閲覧)。それに以下のようにある。

本史料は、本城城主の本城満茂(1556-1639)が、城代をつとめる家臣の大泉茂敦に宛てた書状です。形状は折紙で、現在は軸装されています。

満茂は山形藩最上家の重臣で、由利郡5万5千石余のうち3万9千石余を与えられ、家臣団で最大の知行を有していました。内容は、藩主最上義光(1546-1614)の死去にもかかわらず、山形城並びに山形城下は静穏を保っていることや、当時、体調の思わしくなかった大泉を気遣い、温泉地として有名な温泉(現山形県鶴岡市)で湯治をして静養するように勧めていること等が記されています。

57万石を領有する出羽国最大の大名であった最上義光は、この書状が出される十数日前の慶長19年(1614)正月18日、山形で死去しました。義光死去の

報は、江戸幕府へは正月25日に伝わり、領内へは死去から十日ほど過ぎた正月末から触れられたようです。当時、満茂は、悪化する義光の病状を憂慮して、山形城内にある自身の屋敷に滞在していたと推測され、義光の死後、情報が解禁されて逸早く、本城で留守を預かる大泉へ山形での情勢を連絡しています。

『袖中集』の奥書に記された年次「慶長十八年十一月下旬」は、義光の死の二か月前であったことを考えると、心存より「山形城内にある自身の屋敷」で『袖中集』受け取った可能性は指摘してよいだろう。

2-1

『袖中集』は、いろは順に項目が立てられる。たとえば「ろ」の項目は、特にとりあげるべき言葉がなかったためか項目そのものが立てられていないが、項目が立てられた場合、(1)とりあげたい言葉を含む和歌があげられ、量的には和歌に比較して圧倒的に少ないが、(2)連歌、漢詩があげられることもある。また(3)主に漢語の言葉があげられ、簡略な解説等が記されることもある。大半に(1)

(3)は記されるが、(2)は記されないことが多い。『袖中集』の最初におかれた「い」の項は(1)(2)(3)がす

べて記されている。『袖中集』の記述の仕方を知るにより箇所と考えられるが、分量が多いので、全体の様子うかがわれる、「い」の項目全体の約六割を占めるはじめの箇所を以下に翻字する。

なお和歌に関しては便宜上洋数字で通し番号を付し、後に、例えば「01」と記した場合は、「い」に記された和歌のうち、「01」を付したものをさす。

また、採録するにあたって、注目したと考えられる和歌中の言葉を太字で示すが、24については「い」を含む言葉がないため不明である。

○い

01 新古

在明の月待宿の袖の上に人たのめ成宵の稲妻

02 六家抄 定家

儂とみる程もなし稲妻の光に覚るうたゝねの夢

03 同 家隆

入まてに月は詠ついなつまの光のまにも物思ふ身の

04 同 同

暮る野も契儂秋風になつま招花すゝき哉

05 同 後京極

儂や荒たる宿のうたゝねに稲妻かよふ手枕の夢

06 をしねほす鳥羽田のくろにゐる雁の泪にむせふ秋の

- いなつま
07 葛城や木間に光稻妻を山伏のうつ火かところそみれ
08 金
あふ事を問石神の長面に我心のみうこきぬる哉
09 古 素性法師
引^{いぎ}率^しけふは春の山辺にましりなん暮なはなけの花の
陰かは
10 金
かへる春いつきののみにさしこめて^{（兼読）}□みあれの程た
にもみん
11 式島の道に我名はたつ^{ヤマト}の市不知またしらぬ大和こと
の葉
12 椿市の八十の巷に立ならし結ひし紐をとくるまもお
し
13 無名のみたつ^同の市とはさはけ共いさまた人をうるよ
しもなし
人丸
14 恋をのみ鋸^{ハッ}摩^マの市に立民のたえぬ思ひに身をやかへ
てん
15 昨日たにはむと思ひし津の国の生^ハ田^タの森に秋風そ
ふく
16 秋とたに吹あへぬ風に音かはるいく田の森の露の下
草
- 17 六 定家此哥てにはの手本也切字なくて面白と也
山里は人の通へる跡もなし宿もる犬のこゑ計して
同
18 里ひたる狗の声にてしられけり竹より奥の人の栖は
大倉の入江さはく也いめ人の伏見の田井に雁渡るら
し
19 紅葉浮水と云題にて
20 筏士よまで事とはむ水上はいか計吹嶺の嵐そ
筏士よ岩浪高し大井川峰の紅葉にあからめなせそ
21 いかにして岩間もみえぬ夕霧にとなせの筏落て来つ
らん
22 詞
23 杣人の筏の床の浮枕夏は涼しき臥床なり
六 後京
24 綱手引竹の下道霧こめて舟路に迷淀の川きし
内大一実
25 のほりえぬ淀の筏のつなて縄此世計を引人もかな
思ひかね態と迎はかひそなきいむてふ月の物忘して
六 家リウ
26 心からいむへき月を詠つゝ哀いく夜の空に恋ふらん
六 慈鎮
27 誰もみな我身をつみて思ふへし命は惜き物としらす

や
29 六

家隆

玉きはる命を化に行舟に哀儂波のうへ哉

(一行あき)

東市 西市 三輪ノ市 布留ノ市 輕市カヒヤマト

うるまノ市 安陪ノ市アベ 鏝摩ノ市スルガ

この世にありときかぬ旅人

物いふはうるまの里の声なれや 宗養

市のかり屋の隣まちかき 金

かくるゝはひとりのためと思ふ身に 蒼

古語云 小隠ヘル々リウソウ 大隠ヘル々ニ 朝市ニ

鬼のこゝろをしるかあやしき 紹巴

道は猶のこるしけきの伊駒山 同

役行者伊駒山にて鬼をとられけり彼所に

おにとりと云寺今にのこれり其鬼の子

孫大峯に移る禅鬼と云也

はしのい

いしさよふなみ 徘徊浪ト書 一小井 いさら井源氏ニ

アリ (以下略。一つ書きの言葉の説明30、和歌9)

2-2

『袖中集』は、和歌をあげるにあたって、出典となる歌集名等を右肩に記す場合と、何も記さない場合がある。

記す場合は、たとえば「新古今和歌集」であれば「新古今」、今、「源氏物語」であれば「源」と略されて記される。

こうした勅撰和歌集や「源氏物語」といった、よく知られる歌集や物語の場合は略称であっても支障はなかったかと考えられる。

記される場合で、注目されるのは『六家抄』である。

たとえば先に引用した「い」の和歌では、『六家抄』から九首が採られており、歌集名が記された中では最も多い。『袖中集』全体でも、多くとられた歌集である。片山享氏は

連歌師の新古今集歌に対する関心は、宗祇や兼載の『自讃歌註』や兼載注と目される『新古今抜書抄』、宗長の『秘歌抄』などの諸注釈などによって窺われるが、肖柏による『六家抄』もまた、注釈書ではないが、同様の関心のもとに抄出されたものである。

とされ、その意義の一つとして

『六家抄』の抄出態度によって、室町期連歌師の新古今歌風受容の態度を知ることができる

として⁽⁴⁾いる。『袖中集』における『六家抄』の引用の多さは、「連歌師の新古今集歌に対する関心」の結果編まれた『六家抄』の受容の態度を示すものであろう。また和歌に詠者名が記されることがあるが、『六家抄』から採録された場合は、それが記されていることが大半である。『六家抄』の歌人にも注意がはらわれていたとみることができよう。こうしたことは最上家を中心とする連歌グループの作品を理解するにあたって視野に入れておくべきことと考えられる。

2—3

出典が記されなかった採録歌について考えてみたい。前掲の翻字箇所から、あらためて出典名のみを抽出し、出典は記されていないが勅撰和歌集に収録されている場合は、歌集名を太字で記すと以下のようになる。

- 01 新古
- 02 六家抄
- 03 同
- 04 同
- 05 同
- 06 同
- 07

- 08 金
- 09 古
- 10 金
- 11 風雅和歌集
- 12 (万葉集)
- 13 拾遺和歌集
- 14 千載和歌集
- 15 新古今和歌集
- 16 続後撰和歌集
- 17 六
- 18 玉葉和歌集
- 19
- 20 新古今和歌集
- 21 金葉和歌集
- 22 千載和歌集
- 24 六
- 25 新後撰和歌集
- 26
- 27 六
- 28 六
- 29 六

たとえば、15、20は、01で記された「新古今」(新古今

和歌集』に収録されているが、「新古今」とは記されていない。むろん同じ『新古今和歌集』を出典とした場合でも、ある時は記し、ある時は記さなかったということもありうる。また出典名を書き忘れるなどしたということも考えうる。

その一方で、たとえば肖柏撰『九代抄』のような、和歌・連歌実作のため、本歌取りや証歌とすべき秀歌撰といった歌集等から採録した可能性も考えておくべきであろう。その場合、具体的な書名は不明だが、『新編国歌大観』(KADOKAWA)で検索する限りでは『歌枕名寄』に収録された和歌が多い(07、11、16、20、22、25)。むろん『新編国歌大観』にあらゆる歌集が収録されているわけではないので、『歌枕名寄』が「出典である」と断定することはできない。

2-4

『袖中集』に採録された和歌は、それが採られた他本と、本文が異なることが少なくない。例えば前掲

21 筏士よ岩浪高し大井川峰の紅葉にあからめなせそ
は、『金葉和歌集』には

大井川岩波高し筏士よ岸の紅葉にあからめなせそ
とある。

『袖中集』に採られた和歌は何から採録されたのか、

その出典は明らかにしえないが、本文の異同は引用したテキストにそのように記されていた可能性があると考えられる。また奥書に「古来稀者／筆損落」とある。むろん奥書の常とする謙遜の表現と考えられるが、高齢者なるが故の写し間違え、記憶違いといった可能性はありうるものと考えられる。

3

『袖中集』は、連歌実作のための、一つには言葉を中心に編まれた、本歌取りや証歌とすべき秀歌撰であり、また一つには歌語の読み方や意味を知る辞典である。それに若干ではあるが連歌例や故事などが付され、地名にはどこの国のものが傍注されることがある。

仮に奥書に「毎座連歌に付来可為本歌を加て袖裏に注し侍候」と記されておらず、連歌例に「去嫌」といった連歌に関する事項が記されなければ、『袖中集』は連歌書ではなく歌書といつてよい。

したがって、連歌会にしばしば参加して、『袖中集』を使用して連歌を詠じれば、「歌学」を身に着けることができる。しかし、その歌学は、あくまでも連歌を詠じるにあたって必要なものである。『袖中集』に『源氏物語』から引かれた和歌があり、それを用いて連歌が詠まれたとしても、あるいは『袖中集』でその和歌を知って

おり、前句がそれを踏まえて詠まれているので、それに応じた付句をしたとしても、あくまでも「連歌」における歌学にすぎない。

一方、たとえば『新古今和歌集』の注釈書を学んで、その和歌の意味を知るといふ歌学があり、それは古典解積の歌学といふべきものである。むろん連歌のための歌学と古典解積の歌学が、まったく別に独立した内容といふことはなく、重複する部分もあると考えられるが、連歌を理解するにあたって、実作の歌学と解積の歌学といふ視野は必要であろう。

最上義光の一座した連歌は、すでに翻刻がなされており、一部解積もなされている。今後も注釈がなされていくと思われるが、「実作としての歌学」をふまえて解積がなされるとしたら、『袖中集』でとりあげられた言葉（和歌）は確認しておく必要があるのではないか。とすれば『袖中集』は有益な資料と位置付けることができよう。今後の課題としては、まずは『袖中集』の全文翻刻と出典の確認があげられる。また、最上家周辺の連歌を分析することによって、『袖中集』に記されたことが参考とされていたか、否かの可能性を明らかにすることがあげられる。

【注】

(1) 最上義光歴史館ホームページにて閲覧可。

(2) 『最上義光連歌集 第一―三集』平成十四～十六年、最上義光歴史館。なお「第一集」に「慶応五年三月七日」興行百韻の翻刻がおさめられている。表四句を以下にあげる。

夢想

空も海も汀も君かま、

霞はれつゝ出る日の色

鶯の羽吹に梅のかほり来て

釣簾まく春の袖の薄雪

満茂

義光

昌叱

脇句を満茂が詠じていることから、発句を夢中で得たのは満茂である。満茂が夢想句を得たことを義光を報告し、発句が「空も海も汀も主君の願いどおりに」というめでたい句なので、義光が、いわば夢あわせとして、それをかなえるべく百韻連歌を興行することにした、ということかと考えられる。その夢をかなえんという義光の気持ちの強さは、わざわざ関西(京都か)で、紹巴は不在なものの、昌叱ら当時の一流連歌師が一座していることからうかがえる。満茂は領地を離れることができなかつたのであるうか、一句しか詠じていない。慶長三年(一五九八)九月に豊臣秀吉がなくなつてから一年半ほどの慶長五年三月という年次に注目すれば、満茂や義光は、夢想句を、戦に勝利し、広い領地を治める、といった解釈をしたのではないか。もしそうであるならば、義光の望み

を十分になかえたものであったかはともかく、関ヶ原の戦いの後に、その夢は多少なりともかなえられたとはいえそうである。

(3) 「義光周辺の芸文活動」〔歴史館だよりNo.25〕―最上義光歴史館ホームページによる。2021/8/9(閲覧)。

(4) 『六家抄』〔昭和五十五年、三弥井書店〕解説。

(5) 名子喜久雄「最上義光連歌の世界①」④〔歴史館だよりNo.24〕27〕―最上義光歴史館ホームページによる。2021/8/9(閲覧)。

【付記】本稿をなすにあたり、貴重な資料についてご教示いただいた筑波大学附属図書館に厚く御礼申し上げます。

本稿は科学研究費助成事業基盤研究費(C)(一般)課題番号20K00311「近世連歌の総合研究」による。

(わたぬき とよあき 筑波大学教授)